

フォークナー作品の馬と男と女

平野 温美

Horses, Men and Women in William Faulkner

HIRANO, Harumi

Abstract

There are some noticeable horses in Faulkner's fiction such as Jewel Bundren's horse, the thoroughbred in *A Fable* and the wild ponies in "Spotted Horses." The ones that appear in horse trading are also hard to forget. Horses are particularly significant when we see them in terms of the sexual distinction of characters and the social and private lives of male characters in particular, since only men are allowed access to the animals. Faulkner seems to suggest that the strong desire for catching and controlling wild horses is a kind of disease peculiar only to men. It is well known that Faulkner himself enjoyed being with horses all through his life. He associates his first helping out in his father's livery stable as a young boy with the idea of escaping female influence in the household.

Horses in Faulkner's fiction signify masculine power. Only strong men and men of action ride a horse. We can see the examples in Jewel Bundren and his wild horse or Jack Houston and his murderous stallion. Masculinity includes men's ruling and controlling power in a household and the authoritative power to exert over the community. Horses thus reflect the social distinction of relating male characters. Powerful men like John Sartoris or Thomas Sutpen ride fine horses while the poor and the weak like Mink Snopes or Wash Jones must walk for miles or else ask for a ride. Neither losers nor talkative men like Quentin ride a horse.

In the patriarchal world of Faulkner women and horses alike are the subjects of control and sway by men and are sometimes interchangeable in their roles. It is, therefore, not surprising if Sutpen innocently compares Milly with a mare. Those who cannot control horses may also be unable to control women and may harm the women they are closely related to, mainly their wives.

There is a special affinity between men and horses from which women are altogether excluded. Young boys may reach manhood through mastering horsemanship or winning a horserace. A strong man galloping a fine horse can be the apotheosis of male characters in Faulkner's world. Some fancy that perfect riders attain immortality. Aspiration may also take a form of a vision of a man riding off the Earth into heaven. Horses are involved with the homo-social relationship of male society. On the other hand women are often the embodiments of nature, female sexuality, childbirth, or everyday practicality, all of which are meant to be earthbound. Presenting a striking contrast with femininity, horses symbolize men's desire to break free from the confinement of the practical and mortal life of women and pursue the ideal immortal world embraced only by men.

“Spotted Horses”「まだら馬」について論じた中で Donald E. Houghton は、フォークナーが作中に、ある仕掛けを伏したと興味深い指摘をした。それは「馬と女の役割交換」(362-63)であると言う。具体的には、まだら馬は派手な色彩の女たちのように男たちを興奮させ、「男たちにとって、もちろん無意識だが、とっくに生活から消えてしまった、活力に満ち激しささえ伴ったセクシュアリティを表現し、男たちが、この「馬の娼婦 equine prostitute」に夢中になっている一方で、妻たちは夫と家族のための過酷な労働によって「灰色の家畜に近い存在になっている」、という意味である。確かに、フレム・スノーブスがテキサスから連れてきた一群のまだら馬に対する農夫たちの熱中は尋常ではなく、それを描くフォークナーの筆のさえも、マルカム・カウリーをして「開拓地ユーモア」の最高傑作と絶賛させたところのものである。¹

ホートンが言うように、作中には主としてヴァーナーの言葉が醸し出す生殖と出産の連想が濃厚である。しかしそれだけではなく、ここには死の連想も呼び起こされていることを忘れておきたい。花盛りの梨の小枝が、横に張り出た大枝から上に伸びる様子をフォークナーは、海の深みで眠る溺死した女性の髪が分かれて海水に立ち上がる様に喩える。暗い底の死者から発したような枝に、豊饒を約束する銀色の花が咲く。このエロスとタナトスの両方を含む風景の中に、農夫たちの満たされることのない欲望が、躍動的に描かれ提示されている。馬には、娼婦に惹かれる曇惑だけではなく、また違った根深い、孤独で絶望的な曇惑もあるのではなからうか。

見逃してはならないのは、フォークナーが「まだら馬」の中で、農夫たちの状況を見透かす覚めた視点を、常に意識していることである。農夫たちはいずれスノーブスに騙されると見抜くラトリフの視点がそのひとつで、彼からすると、馬に欲望する農夫たちは「いたずらをして叱られた子供たち」(330)のように見える。またひとつは、

遠くから馬に夢中の男たちの大騒ぎをじっと見つめるリトルジョン夫人の眼差しで、それは何度も繰り返し書き込まれる。馬は子供のような男だけのものではない。馬はその他多くのフォークナーの作品に現れ、数多くのさまざまな男たちが馬と関わって登場する。フォークナー作品から読みとれる馬の意味は何であろうか。そして馬と男と女の関係はどのようなものだろうか。作品に通底するこれらを検証してみるのが、この小論の目的である。

フォークナー自身、生涯にわたって馬と親しんだことはよく知られている。小説の世界と同様、彼の育った時代と場所で馬はごく身近に存在した生き物であったのはもちろんである。Blotner を参照しながら、作者と馬の間柄を見ておくことにする。伝記によると、フォークナー家の子供は八才まで学校へ行かず、就学前の兄弟は存分に馬に乗って過ごした。ウィリアムと弟のジャックは自分たちのポニーに跨り、幼いジョンは大人と一緒に乗って、お気に入りの林を駆けめぐった。3人の子供らが各自のポニーに乗っている写真も見る事ができる (Blotner 86, Cofield 41)。フォークナーは5年生が終わった学年末の休暇、すなわち11歳から12歳になる1909年の夏、父が営む運送業 (貸し馬車屋) の厩舎経営の見習い仕事をして、そこで稼いだお金で野生のポニーを共同購入する経験をする (Blotner 118)。思い出によると、共同購入者バスターは「背の高さは6・5フィート、体重200ポンドの巨漢だが精神は10才」だったというから、購入はフォークナーが主導的に行ったのだろう。二人は競り売りに出かけ、白黒の野生のまだら馬を一頭、4ドル75セントで落札し、この未だ鞍を付けたことのない馬に二輪の荷車を引かせようと試みる。馬の頭に麻袋をかぶせ目隠しをしてから荷車を繋ぎ、二人が馬車に乗ったところで覆いを取った。馬は走ったが、カーブで馬車の片輪を柱にひっかけてしまう。二人は傾いた片方の車軸の上に落ち、その時、バスターがフォークナーの首の後ろをつかんで外に放りだし、自分も飛び降りた。荷車のほうはバラバラになって路上に砕け散り、馬は1マイル先の行き止まりで見つかったというエピソードは、そのまま「まだら馬」の世界である。架空の村フレンチマンズベンドに現れた馬がテキサスから持ち込まれたように、19世紀から20世紀はじめのラファイエット郡にとっても野生馬の供給源はやはりテキサスだった (117-18)。しかし、「まだら馬」の農夫たちと違って、フォークナー自身は購入した荒馬を飼い慣らし、ついに乗るようになったことは、特記しておかねばならない。

1930年、フォークナーはローアン・オークと呼ぶことになる屋敷に移りすむが、そこに自分の手でパドックを整備して数頭の馬を飼い、毎日運動と気晴らしのために馬に乗ったという。フォークナーと養子のマルコムを世話したのは「ネッドおじさん」(658) だったと聞くと、読者はここで *The Reivers* の馬喰のネッド・マックスリンを思い出すかもしれない。フォークナーがエステルに付き添われて初めて J. R. コ

フィールドの写真スタジオを訪れ、渋々写真を撮ってもらったのは、*Sanctuary* の評判でユナイテッドプレスが求めたからだ、その時フォークナーは「馬の訓練に着的使い古したツイードの上着」を着ていたとコフィールドは記憶している（Blotner 94, Cofield 4）。彼はまたフォークナーの馬の扱いについてこうも述べている。「ビルは馬にはまるで時間を惜しまなかった。馬のことをよく知り、ローアン・オークの乗用馬や牧草地の騾馬の手当は、ヨブのように忍耐強かった。もし作家になっていなかったら、どれくらい獣医になっただろうよ」（Cofield 166）。1962年にフォークナーは何度か落馬した。それが作家の死を早めたと言われる。

プロットナーの著したフォークナー伝記で注目したいのは、フォークナーが父の仕事の手伝いをする中で、ミス・モードやマミー・キャリアなど家の中を取り仕切る女性たちの監督の目から逃げ出すことができたという少年の生活状況の変化である。

“I more or less grew up in my father’s stable,” he wrote. “Being the oldest of four boys, I escaped my mother’s influence pretty easy, since my father thought it was fine for me to apprentice to the business.”（117）

母が支配する世界を抜け出したことと、父の仕事見習いとして馬と関わり始めたことが、彼にとって同時であることは、作品理解に無縁ではないような気がする。「まだら馬」のホートンの指摘と重ねると、作品においてもフォークナー自身にとっても馬と男と女の間には構造的関係がありそうである。ここで単純化して結論を先に述べると、作中の馬は、男女の性差を際だつ形で示してくれる。馬に乗るのはもっぱら男だけの事柄であるからだ。さらに、馬は男たちにとっては、肉体的および社会的な面からも、男らしさの特徴を自己のものとして形成し、表現する上で意味を持つと考えられている。すなわち、馬に乗ることが、男性の力強さの会得と結びつけられ、また馬そのものが男性の強さの表れとなっているからである。全ての男が馬に乗ることを許されているのではない。選ばれた者だけが成し遂げる事ならば、野生の荒馬を乗りこなすことは、一種のイニシエーション儀式とも解釈できよう。思い出を語るフォークナーの馬にこめられた思いが、もし作品に展開されているとするなら、懐かしさと、多分に含まれているだろう誇りのその具体的意味に迫ってみたいのである。

馬は騾馬と同様、農耕と移動のための手段であるが、中には独自の個性で目立つものが登場する。たとえば、*As I Lay Dying* のジュエル・バンドレンが購入したまだら馬の流れを汲む馬や、*The Hamlet* のジャック・ヒューストンが所有した種馬などは、余人を近づけさせない荒々しさや強さを持っている。また競馬や馬取引において独自

な存在感を発揮する馬たちもいる。A *Fable* の伝説の盗まれたサラブレッドの馬は、人に感動を与えるひたむきさが印象的である。あるいはアブ・スノープスが騙されてつかんだ彼自身の馬や、*The Reivers* に出てくる鱒が大好物の競争馬コパーメイン／稲妻なども忘れられない。

驟馬が耐える力と謙虚さを表すならば、馬はまず、機動的な動きと力強さを表現する。「まだら馬」を例にすると、馬は男たちに抗いがたい魅力を発し、農夫たちはラトリフの忠告にもかかわらずに購入してしまうが、いったん競り売り人のテキサス男が去ったあとの群は、それまで眺めていたものとは違う存在と化してしまう。馬たちの行動は破壊、混乱、混沌を引き起こす源であり、秩序を打ち壊しつつ疾駆する力そのものである。そしてこの事態に直面し立ち向かう男たちは、その力量が試されることになる。

Later it was obvious that the ponies were so intent upon the men that they did not realize the barn was even behind them until they backed into the shadow of it. Then an indescribable sound, a movement desperate and despairing, arose among them; for an instant of static horror men and animals faced one another, then the men whirled and ran before a gaudy vomit of long wild faces and splotched chests which overtook and scattered them and flung them sprawling aside and completely obliterated from sight. (*The Portable Faulkner* 357)

勝負は明白で、小百姓たち (peasants) にはまるで手に負えない対象であることが間もなく判明する。その後の必死な馬の追跡を、男が女を追う行為に重ねる見方はヴァーナーの言葉として作中に披瀝される。

You take a man that ain't got no other relaxation all year long except dodging mule-dung up and down a field furrow. And a night like this one, when a man ain't old enough yet to lay still and sleep, and yet he ain't young enough anymore to be tomcatting in and out of other folks' back windows, something like this is good for him. (364)

しかしこれは、地主で獣医、さまざまなビジネスを手がけ、しかも16人の子供を得たヴァーナーならではの考えだと、フォークナーはラトリフの口を通して即座に退け、馬を追いかけることに別の意味があることを提示する。すなわち、男たちが馬に魅了されるその状態は、治す薬もない「病気」とであると言うのである。ラトリフは「テキ

サス病」と名付け、女とは無関係の男だけの「病気」であることを、それをもたらした二人の男を明言することで仄めかしている。二人とはフレムとテキサス男で、前者は妻と性的関係を持ってない男であり、後者をラトリフは「ホモ野郎」「Dead-eye-Dick」(364)と呼ぶ。

荒馬を手に入れ、それを制御することが小百姓たちに叶わなかった病的なまでの憧れであるなら、それを成し遂げるのは一体誰なのか。その前に、そもそも馬に乗る人物はだれで、馬に乗らない人物はだれなのかを見てゆくことにする。その両者の区別を知ること、馬と人物たちの関係を明らかにしてみたい。

明白なところから始めると、フォークナーは後で述べる一人の例外を別として、女性を一切馬に乗せない。女性は歩くかまたは馬車や自動車に乗せてもらうしかない。*The Sound and the Fury* でデイルシーは徒歩で礼拝に行くし、*Light in August* のリーナ・グローヴは長い旅行に出発し「アラバマからずっと歩いて」(5) ミシシッピ州に至る。地主の娘であるユーラ・ヴァーナーは兄や男たちの馬車に乗せてもらう。少女時代の彼女に群がる少年たちは驃馬に乗っていたが、16歳になったユーラの家の前には軽装馬車が並ぶようになる。ここにはユーラに近づく男たちの成長とともに彼らの質的变化も同時に伝えられるがユーラ自身は変わらない。

フォークナーの女性たちはステレオタイプが多いという批評があるが、理解が出来る指摘である。² 例えば Leslie A. Fiedler は、フォークナーは女性を軽蔑し「最後の作品を除いて白人でも黒人でも更年期を過ぎた女性にだけ敬意を払って扱った」(320)と言う。それ以外のうち思春期の女性たちは二通りあると述べる。ひとつは「大柄で動作ののろい、精神のない百姓の娘で、彼女らの生殖と誘惑は発情期の動物と同じである」。もう一つは「熱病にかかったような、ひどくやせかけているが性的に飽きない貴族の娘」(321)であると言う。フィードラーの意見は単純過ぎるきらいがあるものの、馬との関係では分かりやすく都合よいかも知れない。確かに、何人かのフォークナーの特徴的女性たちは個々の人格を備えた人物に成長した存在というより、母なる大地、自然、生殖、あるいは直感的な善の行為者といったものを体現し、またイメージさせる象徴的な存在であるからだ。そうならば馬に跨って母なる大地を疾走する者を女性とすることはふさわしくなくなるだろう。その通りに女性たちは馬に乗る強さを発揮することはなく、駿馬を乗り回して荘園を駆けめぐりすることもない。それは男に属する行為となるからだ。馬に乗る、乗らないは、男性と女性を明確に分別し、差異化する一つの印として機能する。

ジョン・サートリスと結婚したドルーシラ・ホークは、例外として馬に乗った女性である。とはいっても、彼女が男性らしい強靱な肉体を持っているのではなく、「女ら

しくほっそりと背が高いのではなく、若者が少年のように痩せて長身」(*The Portable Faulkner* 165) な女性であるとフォークナーは描く。若い男性の持つ正義感を行動にあらわしたかのように、ドルーシラは馬に乗って戦場を走り、戦後もその態度を保っているとベイヤードは観察する。

Drusilla..., who even now, even four years after it was over, still seemed to exist, breathe, in that last year of it while she had ridden in man's clothes and with her hair cut short like any other member of Father's troop, across Georgia and both Carolinas in front of Sherman's army. (166)

彼女は少年のように走り、馬に乗るときは「男のように跨って乗った」(169) のである。ドルーシラが美女桜の香りが好きなのは、それが「馬と勇気」の匂いを凌ぐことが出来る唯一の香りだからというなら、美女桜の香りを除けば「馬と勇気」の匂いこそ彼女の好みなのである。サートリス大佐が殺されたときベイヤードにピストルによる仇討ちを強く勧めるのも「馬と勇気」の文化を酌むからであろう。彼女は「勇敢で気丈夫、戦争や喪失で鍛えられ、しかも根っこところは非常に女性的で、正真正銘の男に愛をそそぐことが出来る」(Blotner 860) とプロットナーは述べるが、もしフォークナーがドルーシラに(フィードラーに従うならば、更年期前の女性であるにもかかわらず) 敬意を払い、なおかつ馬に乗せるためには、ドルーシラは「男」という印を与えなければならなかったと解釈できる。その「男」は大人ではなく少年であったから、ドルーシラはサートリス亡き後の一族を率いる存在となることもなく、もちろん成熟した女性への成長の機会を与えられることもなく、大佐の死後、美女桜の香りを残してジェファソンから姿を消してしまうのである。

全ての男が馬に乗ったのではないことは既に述べた。馬に乗る資格を有するのは、まず馬が表現する男性的な強靭さを自ら持つ者である。まだら馬を購入したものの捕まえることもできなかった男たちに対し、荒馬の流れを汲む馬を乗りこなした人物が一人だけいる。ジュエル・バンドレンである。馬の競りから25年後、15才のジュエルは夜も寝ないで働いて得たお金で一頭を購入する。フレムがテキサスから連れてきて競りで売った馬のうち、自分が購入した馬を捕まえたのはロン・クイックだけだった。そのクイックから彼は買ったのである(*As I Lay Dying* 121)。フォークナーはジュエルがバンドレン一家のうちで異質な人物であることを、*As I Lay Dying* 第一章冒頭から、兄のダールの目を通して語る。

Jewel and I come up from the field, following the path in a single file. Although I am fifteen feet ahead of him, anyone watching us from the cotton-house can see Jewel's frayed and broken straw hat a full head above my own. (*As I Lay Dying* 1)

ジュエルの特徴はこの直後、二人が歩く道が綿小屋に突き当たった時の、彼の行動に示されることになる。小屋の外側を廻る道を歩いて行くダールに対し、ジュエルは真っ直ぐ前を見つめたまま、窓をひとまたぎで越えて中に入り、そのまま四歩で部屋を横切ると、反対の窓を、再びひとまたぎで外に出る。周囲の思惑を気にする事なく、言葉少なく、前面を見据えたまま、力強く、思った通りの行動をする人物であることを、フォークナーは単純で戯画的とさえ言える強い線で描き、そういう人物像を、後で馬を制御する資質を発揮するエピソードと繋げてゆく。彼の行動力は、母親の遺体を町に運ぶ家族の旅の途上で起きる大きな事件、すなわち水による災難と火による災難において、一家に襲いかかる悲劇に対抗できたのはジュエルだけであることで、具体的に明らかになる。*As I Lay Dying* を構成する全体が59のモノログのうち、ジュエルは第4章のみに話者として登場する一方、兄のダールは19章も占める最多の語り手である。言葉の人ダールは馬に乗らない。怠け者で身勝手な父親のアンズも馬を保有しないし乗ることもない。

荒い種馬に乗っていたのはジャック・ヒューストンである。若き日のジャックは奔放であった。故郷を出て放浪した後に再び戻り、自分を待っていた女性の父親を苦勞して説き伏せて結婚したものの、間もなく新妻を失ってしまう男である。週に数回、彼は種馬に乗って犬と一緒にヴァーナーの店に出かける際、馬から下りることなく買い物をしてゆく。「もともと、誇り高いところに、妻を亡くした痛手で、少し高圧的になっていた」(*The Town* 78. ジャックはZackの名前となっている)が、二人の黒人を使用人として雇うことの出来る豊かな農夫であった。彼は死ぬ時も馬に跨っていた。茂みを乗り越す瞬間に、そこに隠れていたミンクに射殺されたからである。

ジュエルとジャックの場合、馬は女性との関係も絡んでいる。ジュエルの場合、母であるアディー・バンドレンを抜きにすることはできない。アディーは時にジュエルに厳しく当たるが、実は彼女にとって彼は特別な「宝」である。ジュエルが他人の土地40エーカーを耕して得たお金で馬を購入したことを知ったアディーは、息子のベッドの傍で激しく泣く。それを知ったダールはアディー以外の誰も知らないジュエルの出生の秘密を嗅ぎ取る。バンドレン家の5人の子供のうち4人はアンズを父とするが、空虚な結婚生活を送っていたアディーは罪を言葉ではなくて実際に知るために、牧師との間で罪を犯し、それによって生まれたのがジュエルであるという事実を、読者は後でアディーのモノログから知ることになる。

ジュエルの馬は母親を独占したい彼の欲望の表れであり、また母親の身代わりでもある。「俺とおっ母だけが高い山にいて、俺が山から岩をやつらの顔めがけて転がり落としたら」と、一回だけのモノローグで彼は言う。母親と一体になりたいフロイド的願望が馬に投影されているから、彼は誰も馬に近づけない。特に父親には「やつにあんたの物は一口だって食べさせないぞ」とあからさまな敵意を隠さない。洞察と言葉の人ダールは、ジュエルの馬と母親をはっきりと結びつける。だから彼女が息を引き取ったと分かった時、「死んだのはお前の馬じゃないんだ」とわざわざ弟に繰り返し、「ジュエルの母親は馬だ」(86)と言うのである。³

ジュエルはやはり母親アディーのために馬を手放すことになる。遺体を運ぶ途上で、川で驃馬が溺死してしまい、新たに驃馬を一組購入しなければならなかったからである。母が死んだから母と一体化したい欲望から解き放たれたという解釈もできる。この馬の役割は終わったのである。怠け者の父や他の兄弟は馬と縁がなくても、彼はまたいつか馬を手に入れるかも知れない。心理学的コンテキストで続けるならば、馬によってジュエルは大人になるために通過しなければならない精神的危機を乗り越えたと説明することもできよう。

結婚間もない妻へ贈り物をするかのように牡馬を買ったのはジャック・ヒューストンである。この馬は小説の中で走り回ることもなく、また誰かを乗せて勇ましい姿を見せたわけではなく、ただ、結婚六ヶ月の彼の新妻を殺してしまっただけである。この馬が意味をもつのは、馬の荒々しさが若きジャック自身と相同性を持つからだ。悲劇が起きたのは、相同性が同時に発生したからではなくて、時間のずれがあったことを、新妻が勘違いしたことに起因する。

Then the stallion killed her. She was hunting a missing hen-nest in the stable. The Negro man had warned her: "He's a horse, missy. But he's a man horse. You keep out of there." But she was not afraid. It was as if she had recognized that transubstantiation, that duality, and thought even if she did not say it: Nonsense, I've married him now. (*The Hamlet* 215)

ジャック・ヒューストンの新妻が、召使いの注意を無視して馬小屋に入り種馬に殺されたのは、かつて暴れ馬のようだった男を結婚という制御に成功した妻が、「馬の血と骨と筋肉は男がすでに捨てた、次々と女をものにする精力と、抑制できない男の逞しさ」(214)を持っているということを見落としたからである。すなわち、馬の「血と骨と筋肉」は、14才ですでに女を囲い、16才で家を出て、13年後にそれまで一緒に暮らしていた女性と別れて故郷に帰る前の、かつてのジャック自身の抑制されない強

韌な性的活力を表すのである。その絶倫な精力は結婚で代弁される男と女の安定や落ち着きをもたらすものではなく、反対に女にとっては危険と不安の源となっている。困っていた女は黒人であったし、一緒に暮らしていた女はもと娼婦であった。両方ともジャックにとって、たとえ女が強く望んでも、婚姻の対象ではなかった。そこで馬と夫を同質化した妻は、男がかつての荒々しさを失って彼女と結婚していることを、目の前の馬に重ねたため、危険の警告を「馬鹿な」(Nonsense)と思ったのである。男性の持つ抑制されない活力が種馬の姿をとって女性を殺害するということならば、馬と女性は相容れないだけでなく、馬は時に女には危険な存在となる。

男の強さとは単に文字通りの肉体的強健さだけでなく、社会的な力もふくまれる。ジュエル・バンドレンやジャック・ヒューストンらが前者の力強さを表す一方で、ジョン・サートリス大佐、トーマス・サトペン、ド・スペイン少佐らは、むしろ家族や一族、地域を支配する実行力を持つ社会の強者として、調教された立派な馬を乗りこなす男たちである。サートリスはジュピターという固有名詞を持つ馬に乗る。“Wash”のトーマス・サトペンは1861年に北軍と戦った時に乗った自分の黒毛の種馬のロブ・ロイを懐かしく思い出す。こういった男たちは実際に戦闘に出かけ、戦後も軍の階級名で呼ばれる勇者であり続けた。すなわち彼らは「雄々しく、誇り高く、勇敢な者たち。勇氣と名誉と誇りを担う最良の人物として人々から認められ選ばれた者たち」(*Faulkner's County* 422)なのである。奴隷制南部社会の支配層を形成した男たちの雄々しさは馬上にこそあったのだ。そのように信じていたウオッシュは、人生の最後に手ひどい幻滅を味わうことになるが、サトペンを殺害した後、自分を捕らえに来る、馬に乗った実力者たちの一団を待ち受け、彼らについて思いを巡らす。

Now he seemed to sense, feel, the men who would be gathering with horses and guns and dogs—the curious, and the vengeful: men of Sutpen’s own kind, who had made the company about Sutpen’s table in the time when Wash himself had yet to approach nearer to the house than the scuppernong arbour—men who had also shown the lesser ones how to fight in battle, who maybe also had signed papers from the generals saying that they were among the first of the brave, who had also galloped in the old days arrogant and proud on the fine horses across the fine plantations—symbols also of admiration and hope; instruments too of despair and grief. (*Faulkner's County* 422)

馬に乗る男たちに対極する、馬に乗らない男たちの特徴は自ずと浮かび上がってく

るだろう。まず、強さとは無縁の者たちは馬に乗らない。お喋りが多くで観念的な男、社会に対する権威や実力において劣る男や、負け組の男たちは馬には乗らない。彼らは女と同様に歩くことになる。妹の処女性を護るという強迫観念を抱いたままサトペン一族の過去を再構築するクエンティン・コンブソンは、1909年に突然ローザ・コーフィールドの家に招かれる。そして「九月初めの乾燥して埃っぽい熱気のなかを自分の家と彼女の家の半マイルを歩いて」(*Absalom, Absalom!* 10) 出かけた。翌年、*The Sound and the Fury* でチャールズ川に飛び込んで自殺するクエンティンは、その当日、無意味に電車や車に乗ったりして町を歩き回る。姪のクエンティンを追いかけるジェイソンは車に乗る。*Sanctuary* の知的で理想家のホレス・ベンボウや、過去に囚われているゲイル・ハイトワーなどは馬に乗らない。

馬に乗ったまま買い物をしたジャック・ヒューストンと対照的に、ミンク・スノープスはわずかの買い物でも片道5マイルを歩いて店まで行かなければならない。牝牛をかけさせるため牛を引っ張って黒人が所有する牡牛の所まで3マイル歩いて行ったところ、拒絶されて再び歩いて帰る。5マイル歩いて老ヴァーナーに会いに出かけても、相手が居なければ昼ご飯を食べないで待たなければならない。ジャックを撃つための鹿玉を2個だけ購入する目的で、フレンチマンズ・バンドからジェファソンの町まで行くのだが、それにはまずヴァーナーの店まで歩き、そこから郵便配達馬車に頼んで無料で乗せてもらう。ジェファソンでは何も食わずに駅で一晩を過ごし、翌朝、ふたたび郵便配達馬車に乗せてもらって帰ってくる。ミンク同様に貧乏白人のウォッシュ・ジョーンズも「歩くかまたは誰かに乗せてもらわなければ買った5ガロンの灯油を小屋まで運ぶことができない」のである。

馬を制御できない男は女性をも支配できず、女を害し、男らしさも損なってしまう。ヘンリー・アームスティッドは妻が苦勞して貯めた5ドルを取り上げ、その金で自分が捕まえられない暴れ馬を買ったつもりとなる。馬を失ったあげく大怪我をしたヘンリーを看護するリトルジョン夫人は獣医を呼びにやり、「いつもの通りの驃馬だと言えはいいから」(361) と言う。ジョー・クリスマスはボビーに結婚を申し込むため馬を走らせるが、途中で馬は止まり、殴っても動かない。目的の店に走ってたどり着いてみたら、女との関係はすでに終わっていた。先祖が馬で疾駆するさまに取り憑かれたハイトワーは妻を自殺に追い込んでしまう。

馬は乗り手の存在を語ることもある。ラトリフは堀の柱につながれた老白馬が、三本足で立ってまどろんでいるのを見て、すぐにウィル・ヴァーナーの存在を知ることができた(*The Hamlet* 25)。老白馬はヴァーナーの登場はもちろん彼自身の年齢と衰えをも暗示する。その時の彼が馬に乗らない行為は、社会的強さの陰りを暗示することになる。ウィル・ヴァーナーは自分の馬にラトリフを乗せ、彼自身はラトリフの

馬車に乗ることを提案する。これはフレンチマンズバンドにスノーブスー族が現れ、大地主のヴァーナー家を脅かし始めることの予兆であると同時に、未だ何も起きていない事柄のこれからの事態の変化を見抜くラトリフへの無意識の配慮と見てとれる。

“Ride my horse on back to the store,” Varner said. “I’ll drive your rig. I want to sit down and ride.”

“We can tie the horse behind the buckboard and both ride in it,” Ratliff said.

“You ride the horse,” Varner said. “That’s close as I want you right now. Sometimes you are a little too smart to suit me.” (26)

馬を制御する男らしさが、家父長制、すなわち男が一家や一族を支配する形態の推進力とつながっているとすると、馬は当然、男性が女性を支配する相を伴って現れることにもなる。男を中心として眺めると、馬と女性は支配と制御の対象として、時に重なり、場合には選択の対象となりうる。ミリーが出産した朝、サトペンが早起したのはミリーが自分の娘を生んだためではなく、仔馬が生まれたからであったことを、ミリーの前でサトペンは隠したりしないし、召使いの黒人女も不思議に思うことはない。

“Well, Milly,” Sutpen said, “too bad you’re not a mare. Then I could give you a decent stall in the stable.”

Still the girl on the pallet did not move. She merely continued to look up at him without expression, with a young, sullen, inscrutable face still pale from recent travail. Sutpen moved, bringing into the splintered pencils of sunlight the face of a man of sixty. He said quietly to the squatting Negress. “Griselda foaled this morning.”

“Horse or mare?” the Negress said.

“A horse. A damned fine colt....What’s this?” He indicated the pallet with the hand which held the whip.

“That un’s a mare, I reckon.” (*Faulkner’s County*413)

ミリーと牝馬を比較し、赤ん坊も馬に喩えることにサトペンは何のためらいもない。彼はウオッシュが思うほど残酷な言葉を吐いたとは思わないから、なぜ自分が殺されるのかを知らないまま息絶えることになる。馬と女は支配の対象として交換可能であるという事と、馬は男にとって男らしさを成り立たせる一部であることを考慮すると、サトペンの台詞は非常に分かりやすい。だとすると、読者はウオッシュの突然の人間

性の目覚めに驚きもする。ミリーが貧乏白人の孫娘だったから馬と比べたわけではないことは、*Knight's Gambit* の大富豪のハリス夫人でさえも再婚の夫を得るまでは馬と競合しなければならなかったことを思い出せばいい。「もしハリス夫人が人間でなくて馬だったら、とうの昔に大尉はすぐに夫人と結婚していただろう」(167)と郡の男たちはガルドレスについて噂したものである。

馬の制御が男らしさの証になるように、馬の取引は男らしさを競う闘いの場である。馬と人間に関する知識と知恵と想像力がここでは試される。ここでも負けた者は男らしさを損ない、女を害してしまう。アブ・スノーブスは伝説の天才馬喰パット・スタンパーに挑むが、完敗し、その挙げ句は妻が苦勞してやっと手に入れたクリーム分離機も手放さざるを得なくなる。妻は後で分離機を取り戻すが、アブは馬も騾馬も失ってしまった。この苦い体験が、アブのその後の人生を変えてしまったとラトリフは言う。反対に勝った男は女とのつながりを構築することができるし、またその能力を証明することにもなる。ユーラ・ヴァーナーを手に入れたアブの息子のフレムは、テキサスから連れて来た一群の野生のまだら馬を、力や知力に劣り、馬を取り押さえられない男たちに売り払うことに成功する。*The Knight's Gambit* のギャヴィン・ステイヴンズは、ハリス夫人の息子マックスがガルドレス大尉を馬を使って殺そうとした企てを、推理によって事件を未然に防ぐことが出来た。その成功の結果、彼は50歳でついにハリス夫人と結ばれるに至ったのである。ギャヴィンは馬に乗らないが、他の二人は馬の名手である。彼は知性と想像力で馬に強い二人の男性を遠くに退けることで妻を得たのである。生涯に何度も結婚した *The Reivers* のネッド・マッキヤスリンは機略縦横の馬取引人である。

馬は男の男らしさを育て、人格の形成に寄与することもある。そこに女性や女性的なものは介在しない。男と馬だけの世界で、馬は男の価値観を極める仲間であり、手段であり、目的となる。*The Reivers* の若きルーシアス・プリーストは母親から離れ、ネッド・マッキヤスリンの指導の下、競争馬に乗って優勝する経験を経て、男性として成長する。*A Fable* の英国人飼育係の人生と人格は、馬への献身によってすっかり変わってしまう。「なぜなら、男と馬のあいだに、単なる共感ではなく、頭から頭への理解でもなく、心から心へ、肉体の腺から腺へと流れる密接な親和のようなものがあったからだ。」(*A Fable* 146)

馬は男に男らしさを確認させる。自分を支配しようとする女性ジョアナ・バーデンを殺害する予感を抱いたジョー・クリスマスが、殺害の直前に馬の匂いを嗅ぎたくて、朽ちかけた厩に行くのは、女の支配を抹殺する力を得るためである。馬が牡か牝かは

問題ではない。「馬は女でないからだ。」そこで彼はこう呟く。「牝馬でさえ男のようなもんだ」(*Light in August* 83)

男の力強さを表象する馬は、男らしさを競う男たちの間では、女の敵ではない。ガルドレス大尉がハリス夫人のものと思われるお金で、若い女ではなくて馬を買ったと分かった時、郡の男たちが大尉を許す気になったのは、ハリス夫人の名誉のためではなく、大尉が「馬を買うという、まともな金の使い方をした」からである。彼は「姦通においては名誉を、情夫としては節操と自制を重んじた」(*Knight's Gambit* 169)と判断され、男たちの尊敬を得たのである。馬と女は二者択一の対象であっても、馬を選ぶことで、男性のセクシュアリティは昇華され、一段と高次の状態に高められたのである。馬は男だけに通用するモラルの内実であり、それによって男だけの社会的絆を確かめ認めることができるのである。馬は「男同士の絆」、すなわち、イヴ・K・セジウィックが説く「ホモソーシャルな関係」(1-2)に組み込まれた存在なのである。

馬の制御は男による女の制御や支配と同じではない。馬とそれに乗る男には性差が介入する要素はないとフォークナーの人物は言い、男と馬が一体となった姿に、性を越えた、死も越えた神話世界の永遠と不滅の相を与えているからである。ガルドレス大尉がハリス家の馬に乗って広場を横切るのを、甥のチャールズと一緒に見たギャヴィン・スティ・ヴンズは、乗馬姿の大尉を「半人半馬のケンタウロスではなくて一角獣ユニコーンであった」と形容し、更に甥を通して次のように描写する。

He [Captain Gaudres] looked hard, not that flabby hardness of too much living which Harriss's butlers had had, but the hardness of metal, of fine steel or bronze, desiccated almost epicene. And as soon as his uncle had said it, he, Charles, could see it too: the horse-creature out of the old poetry, with its single horn not of bone but of some metal so curious and durable and strange that even the wise men could not name it; ...That was how, his uncle said, the man seemed a part of the horse he rode; that was the quality of the man who was a living part of the living horse: the composite creature might die, and would and must, but only the horse would leave bones; in time the bones would crumble to dust and vanish into the earth but the man would remain intact and impervious where they had lain. (*Knight's Gambit* 165-66)

チャールズの伯父、すなわちギャヴィン・スティ・ヴンズにとって、ガルドレス大尉はハリス夫人を中にして、いわば恋敵の立場であるという憶測もあった。少なくとも

も郡の男たちの噂やマックスの殺意などを考慮して総合するとそうなるのである。しかしながら、夫人とふたりの男性それぞれとの間で変動するだろう心理的距離は直接にも間接にも語られることはない。フォークナーは故意にそれを伏すことで、恋敵であるかも知れない男性に対するスティ・ヴンズの敬意の度合いが、彼によるハリス夫人の評価を示す結果になることを目論んだのかもしれない。恋敵が優れていればいるほど、恋の相手も優れるという力学である。しかしそれだけにとどまらないものがここから伝わる。目撃した優れた馬の乗り手である「恋敵」を、神話的存在に喩え、若い甥がそれに同意し想像を膨らませるのである。この場面に夫人が入り込む隙間は完全に塞がれ、夫人は男と男を関連づける役割でしかない。

半人半馬のケンタウロスは人と馬の分裂を、ユニコーンは一体を表す故に比喻としてスティ・ヴンズは使うが、一方でケンタウロスは根元的衝動を、ユニコーンはファルスへの連想を呼ぶ。ギャビン・スティ・ヴンズは50歳に至るまで独身であった。ここでスティ・ヴンズが乗馬姿のガルドレス大尉に性的欲望を抱くという危うい図式も可能となろう。しかしフォークナーは即座に「生臭い」肉体的連想を打ち消し、代わりに金属的な乾燥した「性を超越した」イメージを読者に強要する。「生きている馬の生きている一部になっている男」を脅かす対立概念があるとすれば、それは死であり、女性では決してない。そしてその死さえもねじ伏せられている。⁴

強い馬に乗って疾走する英雄的な勇姿を、神聖な存在の幻視まで高めたのはウオッシュ・ジョーンズであった。戦争後も、サトペンが黒色のサラブレッドに跨って疾駆する世界こそ本当の世界に見えるウオッシュは、サトペンは「立派で誇り高い方だ。もし神さまご自身が天から降りて自然の大地を馬で走るなら、あの姿になりたいと願われるだろう」(*Faulkner's County* 415)とさえ思う。さらに、大地を離れ、そのまま神の国まで駆け上がる幻想を描いたのが、掌編“Carcassonne”である。主人公の詩人の意識の中で、一頭の荒々しい馬が蹄の音を轟かせている。「何か大胆で悲劇的で厳粛なことを成し遂げたい」という彼の強い意欲は、「青い電気が流れる両眼と、もつれる炎のたてがみを持つ鹿革色の馬に跨って疾駆し、疾駆しながら山を上るや、地から離れて空高く、天の世界に登って行く」(*These Thirteen* 267)自分の雄々しい姿の幻像を結ぶのである。

女性は男と馬の世界のどこに配されているのだろうか。フォークナーは完全に女の存在を無視したわけではない。あくまで女性を周辺に追いやっているが、女性の存在と視点、女性的表象をかいま見ることは出来る。現実の世の中では、「かつて、立派な馬に跨って傲慢に誇り高く立派な荘園を駆け抜けた」男たちの世界は崩壊してしまった。孫娘の出産で突然それに気づいたウオッシュの手でサトペンは殺害される。天に

駆け上る夢を抱く「カルカソヌ」の詩人は、実はねぐらとしている酒場の上のネズミがはびこる暗い屋根裏で、タール紙の下に横たっている惨めな現状である。そしてその家の持ち主は女性である。「女性は賢い。現実には惑わされず、現実には傷つかず生きる術を学んでいるから」と詩人は言う。「まだら馬」で男たちが馬に夢中になってゆく一部始終を見つめているのは、水汲み、洗濯、食事作り、けが人の介抱と、忙しく立ち働く遠景のリトルジョン夫人である。フォークナーは彼女の姿を何度も執拗に書き込むことで、作品に輪郭を与える。それによって男たちの馬への情熱を愚かさや滑稽さで、さらに際立たせる。しかし、女の現実の苦悩に共感しつつも、それで滑稽さを損なうことはしていない。黙って見つめる夫人を配することで、むしろ滑稽さを大目に見て欲しいと願っているようにさえ読める。

結 び

フォークナー小説の男性と女性が対称的な立場であるのなら、男にとって馬は、あるいは女へのセクシュアリティの比喩あるいは代替の役割をつとめるかもしれない。しかし、圧倒的に男が支配する家父長制社会の、男と女が非対称的である世界では、馬と女性はいずれも支配の対象となる。その視点からは、両者の立場は時に重なったり、役割を交換したりすることもあるが、それは交差の一時的な出来事で、基本的構造ではない。「馬と勇氣」を一对のものとしたのは男を志向した女性ドルーシラであった。それは女が前提において排除されている男社会における概念である。女と馬を組み入れた単純な図式として、馬と勇氣を自分のものとした男のみが女を得る、あるいは女を支配することができるという事もある。しかし、馬を巻き込んだ男だけの絆の世界では女を支配することが最終目的ではない。男たちのホモソーシャルな世界では、優れた馬に乗った男らしい男こそが最終目的である。馬は男たちの世界を構成する中心に高々と位置し、馬を制御し馬と一体化した選ばれた者は、物質的なこの世が終わっても生き続ける永遠の相を獲得すると、フォークナーの一部の男たちは夢想する。小さな村の貧しい農夫たちが必死で追いかけていたのは確かに荒馬であったが、捕まえようとしていたのは彼らの手の届かない力であり、富であり、それらを含む男らしさの名誉であり、理想である。女とは、どうしても逃れられない大地あるいは現実生活、物質的なこの世を意味し、男の夢を愚かと認識する者とするなら、男にとって馬は女を封じ、そこから逃れて、男の理想世界へと飛翔したい彼らの欲望の表象となる。

注

1. “Spotted Horses” は、もともと1931年6月に *Scribner's Magazine* に発表された。しかしマルカム・カウリーが1946年に *Viking Portable Faulkner* を出すときに使ったのは、*The Hamlet* からの抜粋であることはよく知られている。その理由について、カウリーは次のように前置きした。「(スノーブス三部作は) 数多くの印象的な逸話を含むが、途方もなく面白いということでは「まだら馬」がいちばんだ。『村』で使われて、ここに再録したものは、雑誌版より三倍長く、内容も三倍良くなっている。私には、これはアメリカ開拓地ユーモアの頂点となる作品と思われる。開拓地ユーモアとは、さかのぼるとデイヴィー・クロケット記録にたどり着き、そしてマーク・トウェンで初期の最盛期に達した長い伝統である。」(*Portable Faulkner* 322)

2. フォークナーの女性についてはいろいろな意見がある。彼は女性に同情的だったという批評もあれば女性嫌いだという主張もある。Fowlerによるとフォークナーの作品には対照的な女性像があり、優れて特徴的な人物もいれば、忍耐と不屈を体現する女性もいる。しかし、多くはリーナやユーラのように男性の特徴となっている知的意識の欠けた女性である。が、例外もいる。例外は2種類あって、ひとつは男性主義と同等の思考の強化をはかる女性(アディー・バンドレン、ジョアナ・バーデン、ドルーシラ・ホーク、シャーロット・リッテンマイヤー) もうひとつは性欲の時代を無事に超えた年輩女性(ジェニー・デュ・プレ、ローザ・ミラード)である。若く、性的で、恥ずかしくない程度に女性的で論理的な女性はフォークナーの最後に現れる類で、それはリンダ・スノーブス・コールだろうと述べる(viii)。Minrose C. Gwinは、フォークナーはたしかに家父長制文化における白人男性としての経験から書いたが、創造的試みの力で彼は文化の境界線を探索し爆破したと述べる。プロットナーはフォークナーの女性登場人物は実世界の彼の周りの女性にモデルが見いだせることを語っている(“William Faulkner: Life and Art” in *Faulkner and Women* 3-20.)

3. ダールの狂気と彼が誰よりも洞察力と想像力があることについては、*Faulkner in the University* 110 and 113参照。

4. 男性のホモソーシャルな欲望と同性愛についてセジウィックはこう述べている。「男性支配社会では、男性の(同性愛を含む)ホモソーシャルな欲望と家父長制社会の力を維持・譲渡する構造との間に、常に特殊な関係が・・・存在するのだ・・・時代によってその関係は、イデオロギー上はホモフォビアとして、あるいは同性愛として顕れることもあろうし、そうでなければ、このふたつがひどく反発し合いながら強烈に構造化され組み合わせあって顕れることもあろう。」(38)

Works Cited

- Blotner, Joseph Leo. *Faulkner; A Biography*. 2 vols. New York: Random House, 1974.
- Cofield, Jack. *William Faulkner*: The Cofield Collection. Oxford: Yoknapatawpha Press, 1978.
- Cowley, Malcolm. "Editor's Note," *The Portable Faulkner*. New York: The Viking Press, 1967.
- Faulkner, William. *The Sound and the Fury*. London: Chatto & Windus, 1970.
- _____. *As I Lay Dying*. London: Chatto & Windus, 1962.
- _____. *Light in August*. London: Chatto & Windus, 1967.
- _____. *Absalom, Absalom!* London: Chatto & Windus, 1965.
- _____. *The Hamlet*. New York: Random House, 1964.
- _____. *Knight's Gambit*. New York: Random House, 1978
- _____. *A Fable*. New York: Random House, 1954.
- _____. *The Town*. New York: Random House, 1957.
- _____. *The Reivers*. New York: Random House, 1962.
- _____. *These Thirteen: Volume Two of the Collected Short Stories of William Faulkner*. London: Chatto & Windus, 1963.
- _____. *Faulkner's County*. London: Chatto & Windus, 1955.
- _____. *The Portable Faulkner*. New York: The Viking Press, 1967.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in American Novel*, New York: Stein and Day, 1982.
- Fowler and Abadie, eds. *Faulkner and Women: Faulkner and Yoknapatawpha, 1985*. Jackson: University Press of Mississippi, 1986.
- Gwin, Minrose C. *The Feminine and Faulkner: Reading (Beyond) Sexual Difference*. Knoxville: University of Tennessee Press, 1990.
- Gwynn, Frederick L. and Joseph Blotner, eds. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958*. Charlottesville: University of Virginia Press, 1959.
- Houghton, Donald E. "Whores and Horses in Faulkner's 'Spotted Horses'." *Midwest Quarterly* 11, 1970, pp. 361-369.
- イヴ・K・セジウィック . 『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、上原早苗 , 亀澤美由紀訳、名古屋大学出版局、2001.